

Title	基研の共同利用研としての意味と役割について大学からのコメント(基研固有の問題,京都大学基礎物理学研究所将来計画シンポジウム)
Author(s)	松本, 賢一
Citation	物性研究 (1987), 48(2): 160-160
Issue Date	1987-05-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/92519">http://hdl.handle.net/2433/92519</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 基研の共同利用研としての意味と 役割について大学からのコメント

富山大・理 松 本 賢 一

与えられた上記テーマについて、基研の基礎物理学のセンターとしての機能を如何に維持向上させてゆくかとの観点から、当面痛感する2点をコメントする。

### 1. 図書・文献と研究情報センター機能の整備

基研物理学のセンターとしての役割にふさわしい図書・文献の充足と研究情報ネットワークセンター機能の保持を図る(予算要求と共に、支出現在枠の見直しと図書・文献への支出枠の優先的拡大)。

### 2. 基研研究計画の果す役割の維持向上の工夫

最近みられる科研費等他研究会用財源の増大傾向(特に国立大研究機関に於ける)とそれに伴う基研研究計画用財源の相対的減少傾向の中で、基研研究計画の果す役割の維持向上は、これ迄以上に努力を要する課題となっているが、最も重要な課題である。そのために、従来型研究計画を大事に継続発展させると共に、その一定枠を転用して、基研で行うことの長所を生かした有効で特色のある新しい型の研究計画を創案実施する必要性に迫られていると思う。

一例として、期間1ヶ月(レクチャー、討論、分担及び共同の検討、いくつかの共同研究の生成等を期間内に包含し得る)程の、若手研究者を主とし若干の不可欠な年輩研究者を含む適当規模(自己負担且全期間参加なら希望参加可)の研究会が考えられる(1ヶ月型KSIのイメージにも近い)。従来型研究計画とアトム型研究員制度の財源の一定枠(前者の0.2~0.3と後者の0.4~0.5程度)を転用すれば十分実施可能であろう。

このような研究会は亦、基研所員と研究会参加者との共同研究の機会を増し、基研の固有研究と共同利用の関係にとっても相互プラス的に働くであろう。

## 一 般 討 論

記録 小 嵐 康 史(基研)  
宗 博 人(基研)  
和 田 隆 宏(基研)

益 川：基研は理論全般の研究所であり、他の研究所は理論+実験で各々の分野に密着した研究所である。

この両方が必要であることは実験家も含めて多くの人の賛同を得ている。この点牧氏の発言は有